



Title	児童養護施設における性にまつわる言説と実践に見る子どもの権利―日本とバングラデシュの施設に着目して―
Author(s)	木原, 琴
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101614
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (木 原 琴)

論文題名

児童養護施設における性にまつわる言説と実践に見る子どもの権利
ー日本とバングラデシュの施設に着目してー

論文内容の要旨

本研究の目的は、児童養護施設（以下、施設）における子どもの性にまつわる事柄の言説と実践の実態とその社会的背景を明らかにすることである。そして、その実態と背景を踏まえ、子どもの権利を形づくる「保護」と「自律」の実現のあり方を捉えることである。研究方法は、日本とバングラデシュの施設を対象とした質的調査である。

議論の対象となる「性」は人格形成に密接に関わる要素であり、健全な人間関係の基盤を築く上で、個々の「性」の尊重は不可欠である。また、代替的な生活の場である施設では、虐待や貧困等の理由で家庭での生活を失った子どもに多様な背景を持つ人々と健全な関係を築くことが求められる。したがって、施設における個々の「性」の扱いを理解することは極めて重要である。しかし、施設環境における「性」に関連する問題が顕在化している。また、「性」に対するタブー意識により、その実態が見えにくく、結果として子どもをさらに脆弱な立場に置く可能性がある。これらの背景を踏まえ、本研究では、施設に入所する子どもの性にまつわる事柄の言説と実践に着目し、子どもの権利の実現のあり方を捉えた。

分析視覚として、社会構築主義の視点を参照した。そのため「性にまつわる事柄」とは、職員が日々の家事や養育の中で、意識的または無意識的に性的であるとする認識を指す。また、「自律」は能力としての自律を提唱した石川（2009）の議論を参照した。加えて、施設の特性を理解するために、アーヴィング・ゴフマンの提唱する「全制的施設」（Goffman 1961）を援用した。

本研究の独自性は、以下の3点である。①先行研究では着目が不足していた、施設における子どもの生活の中の性全般にまつわる事柄に関する課題に焦点を当てた点、②日本とバングラデシュの2カ国の施設に着目した点、③子どもの権利を巡る「保護」と「自律」の両者の概念は親の養育力の弱体に起因するとした理論をもとに、施設での「保護」と「自律」の実現のあり方を明らかにした点である。下記にそれぞれの特徴を示す。

第一に、両国ともに施設に入所する子ども等、社会的養護が必要な子どもの性に関する先行研究は、性的な問題行動や課題として認識される事柄に焦点が偏っていた。本研究では、この背景として「施設に入所する子ども」が「受動的な存在」とされ、「性」が「タブー視」された歴史的な文脈が影響を与えたことを指摘した。この文脈は、子どもに「性」について選択をする余地を与えず、大人の決めた型にはまることを強要する傾向にあった。この背景から、施設における「性」に関する研究は、性的問題行動や搾取を是正し、いかに「保護」するかという視点に偏ってきたことを指摘した。この点を踏まえ、本研究では、広義に日常生活で性的であるとされる事柄に着目した。そして、是正や保護を重視する視点に限らず、施設に関わる者が相互作用の中で「性」をどのように形成するのかという視点からの論考を試みた。

第二に、日本とバングラデシュの施設に着目した。施設と性に関する先行研究は、地域や国家の特徴を十分に考慮した分析が不足していた。異文化を含めた分析は、自らが属する社会や文化を相対的に浮かび上がらせ（南出 2014）、多角的な理解をもたらした。なお、バングラデシュに着目した理由は、同国における性へのタブー意識により、施設での子どもの性の実態が十分に把握されておらず、子どもの権利の視点からの実態把握が重要な研究課題であったためである。

第三に、子どもの権利を巡る「保護」と「自律」の概念が親の養育力の弱体を起源とする理論（森田 2008）をもとに、施設でのそれらの実現のあり方を明らかにした。親とは異なる保護主体である施設においてこの理論を取り上げ、施設に入所する子どもと家族の関わりのあり方や、親代わりを担う施設養育の限界と課題を浮き彫りにした。

以下では各章の内容について記す。序章と第1章では、上述した研究目的と背景を整理し、本研究の独自性と意義を明確にした。

第2章では、両国の施設の制度的背景を整理した。日本では措置制度のもと、国家による生活保障がある。一方、バングラデシュの特に民間が運営する施設は、国家による生活保障が不十分であり、寄付に依存する。また、日本

の施設は子どもが家族から受けた虐待へのケアを重視し、バングラデシュの施設では家族の貧困を背景にした施設運営が特徴的である。これらの違いが性にまつわる事柄の言説や実践に及ぼす影響を以降の章で議論した。

第3章では、バングラデシュの施設における「施設経営」への子どもの多様な関わりと、それにもとづく子ども像及び子どもの権利を捉えた。調査手法として、施設Zでの子どもと職員を対象とした参与観察及び他3施設での視察を実施した。調査結果から、子どもの施設経営への参与が施設生活の安定に寄与する一方、子どもを「適応を求められる存在」として位置づける子ども像を形成していたことが明らかになった。また、大人の働きかけをもととする子どもの施設経営への関与が、子どもの「自律」を阻害し得ることを示した。本章は、施設における子どもの生活背景を包括的に理解し、子どもの権利についての議論を深めるための基盤を提供した。

第4章では、日本の施設における子どもの性にまつわる事柄の言説と実践を明らかにし、その社会的背景を考察した。調査手法は、施設Aにおける子どもと職員を対象とした参与観察、及びその他、計8施設での職員10名への面接であった。調査の結果、職員と子どもの間でのスキンシップ、「子どもの恋愛」、月経、洗濯物の取り扱い、入浴、性的マイノリティ、性的言動、性教育の実態を把握した。これらは、施設、子どもの家族、国家の実態とそれらの実態への職員の意識が重なり形成された。また、施設特有の要素として、施設入所する子どもの複雑な家庭背

景や被虐待経験等への職員の意識、子どもが措置され保護されている立場、職員の親ではなく職員であるという理解と立場、集団養育・施設生活があった。これらの背景をもとにつくられた性にまつわる言説や実践は、性は典型的な枠にはまり、避けるべき、躊躇や葛藤が伴い、抑圧され得るとの認識を子どもに与える可能性を示唆した。これにより、子どもは性の独自性や多様性の表現が困難となり、保護や管理の強化につながると論じた。

第5章では、バングラデシュの施設における子どもの性にまつわる事柄の言説と実践を明らかにし、その社会的背景を考察した。調査手法として、施設Zにおける子どもと職員を対象とした参与観察、及び職員12名への面接を実施した。その結果、職員と子どものスキンシップ、「子どもの恋愛」、月経、衣類、身体を洗うこと、SOGIEに関する実態が明らかになった。これらは、施設や子どもの家族、地域や国家の実態とその実態に対する職員の意識が重なり形成された。特に、施設特有の要素として、施設に入所する子ども特有の背景への職員の意識、施設経営の困難と外部とつながる必然性、職員特有の立場・複数の機能を担う施設の職員の立場、集団養育・施設生活があった。また、性にまつわる言説と実践は、職員が意識する施設と地域や家族が交わす「期待」への応答により正当化された。この応答性は、社会から閉鎖された「全制的施設」(Goffman 1961)とは異なる特徴を示した。さらに、施設外の声が性にまつわる言説と実践に影響を与え、大人の管理的介入を肯定する要因となることを明らかにした。加えて、抑制の強い特徴が性にまつわる言説と実践に見られ、規範として子どもに内面化され得ると論じた。

第6章では、日本とバングラデシュの施設に入所する子どもの性にまつわる言説と実践とその社会的背景をもとに、子どもの権利の実現のあり方を捉えた。考察にあたり、家族の支援的な関与に焦点を当てた。バングラデシュの施設では、国家の生活保障が不十分な中、家族の関わりが子どもの「保護」と「自律」の実現を左右した。例えば、施設は、子どもの下着や月経用品の調達を家族に任せ、家族が養育に関与する機会を提供し、家族としての権利と責任を再認識させた。このように、施設は国家の生活保障の不足を補い、子どもを「保護」した。一方で、家族に依頼する役割を子どもが担い、子どもを「施設経営」に協力する存在とする側面があった。さらに、家族が十分に応じない場合、子どもが職員に訴える必要があった。この状況は、子ども自身で選択できるよう促すことが、根本的なニーズを否定する危険性を孕む姿であり、結果として「自律」を阻んだ。一方、日本の施設では、国家による生活保障が整う中、養育について家族に直接的に頼らない。このため、職員の養育の課題と限界が「保護」と「自律」の実現に影響した。職員は、子どもへの最善を考慮した上で「親ではなく職員である」と意識し、子どもの性にまつわる事柄に関わる特定の家事や育児を控えた。また、特に男性職員は性的加害への誤解を恐れて特定の家事や育児を控えた。このような関わり方の制限は、真摯な養育実践の中で意図せず「保護」の不足を引き起こす危険性を示唆した。また、職員は被虐待経験のある子どもの性にまつわる事柄を是正の対象とし、保護を強調する一方で、自律の基盤である子どもの「行為主体性」(石川 2009)を損なった。

本研究では、施設に入所する子どもの性にまつわる事柄の言説と実践を明らかにし、その形成の社会的背景を示すとともに、子どもの権利の実現のあり方を捉えた。また、施設における子どもの性にまつわる事柄に対して、施設外への協力や受け入れを求めるか否かを含めた職員の意識と対応が、性にまつわる言説と実践、さらには子どもの権利の実現に直接的に影響することを明らかにした。この職員の意識は、子どもが置かれる社会的文脈に強く依存していた。国際協力を基盤とする施設では、家族や地域社会とのつながりが性にまつわる言説と実践、ひいては

権利の実現に重要な役割を果たしていた。一方、国家の保障が整う施設では、職員の養育の課題や限界がそれぞれに影響していた。これらの結果から、施設環境における「保護」と「自律」の均衡を適切に保つためには、子どもが置かれる社会的文脈を十分に理解し、それに即した支援構想の必要性を示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (木 原 琴)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	山本 ベバリー・アン
	副 査	教授	杉田 映理
	副 査	教授	斉藤 弥生

論文審査の結果の要旨

Title of dissertation: 児童養護施設における性にまつわる言説と実践に見る子どもの権利—日本とバングラデシュの施設に着目して—

Discourse and Practice Around Sexuality Concerning Children's Rights in Residential Care Facilities: Focusing on Facilities in Japan and Bangladesh

This thought-provoking doctoral thesis asks us, the reader, to spend some time considering how the issues of sexuality and gender (性) operate in discourse and are revealed through practices in children's homes. As such, the thesis is throwing light on two areas that are often concealed from the public and even the researchers' eyes.

Taking Erving Goffman's idea of a total institution to think about the structure of living in a children's homes, defined in part by surveillance, the research sought to also explore two sides of children's rights, autonomy and protection. If we put the words 'sexuality' and 'children' together we find that research has tended to focus on the protection side of children's rights. Through this study Kihara attempts to bring both parts equally into the equation in relation to children in care and especially in relation to the issue of sexuality.

The main fieldwork was conducted in two children's homes over extended periods of time, one in Japan (December 2018 to March 2020) and one in Bangladesh (August 2022 and August 2023). Interviews were also conducted at additional care homes in Japan with 10 staff members in 8 institutions. One observation to come out of this study is that the conceptualization of a children's home as a total institution may not be accurate, especially in the context of the facility in Bangladesh, which was relatively open to the outside world. The openness was partly as a result of an onsite school and the phenomenon of 'volunteer tourism' bringing regular visitors to the facility. The relationship between the parents and the children was also stronger than in Japan. While there was monitoring and structured routines of and for the children in both field site facilities, perhaps a more important shared feature was the space created for collective care of children by a variety of adults. Overall, the committee felt this was a highly original piece of research. In particular, the extensive fieldwork and the careful analysis of the results of this were highly evaluated.

The thesis is made up of five chapters, plus introductory and concluding chapters. Sections of Chapter 2 have already been published in a peer reviewed publication (木原琴(2024)「トラウマを体験したバングラデシュの社会的養護下にある子どもへの支援—日本におけるトラウマインフォームドケアの視点を持つ支援に着目して—」『南アジア・アフェアーズ』20,46-62.) . Chapter 4 also draws heavily on a separate peer reviewed publication (木原琴 (2023) 「児童養護施設において性 (生) はどのように語られているのか-直接処遇職員と子どもの関わりに着目して」『ソーシャルワーク学会誌』47,1-15). Chapters 3 to 6 are written in an academic journal style with an introduction to the problem, a section on the research design and analysis, a presentation of the results and a discussion.

To give an overview of each chapter, the introductory chapter serves an extended abstract introducing the problem, the research design and the theoretical framework. This chapter is well written and informative. It provides the necessary information to orientate the reader to the study and the thesis. Chapter 1 introduces some of the relevant

extant literature in the field, chapters 3 to 6 introduce additional relevant literature. Chapter 1 primarily focuses on how the issue of sexuality has been researched in relation to children's homes in Japan and Bangladesh. This shows a heightened awareness in Japanese research of what is presented as 'sexually problematic behaviour' occurring within children's home. A background to government policy in this area is also introduced. There has also been some recent literature focusing on sexual orientation and gender identity (SOGI) as an issue in children's homes that highlights the lack of training of staff to deal with these issues. The section on Bangladesh is shorter and focuses on two main issues, the sexual exploitation of children who live on the streets and the strict taboo around sexuality. Section 3 argues that in both the Japanese and Bangladeshi literature children are positioned as passive in relation to sexuality, and that only in the literature on sexual minorities do we see any recognition of children's autonomy in relation to sexuality. The final section introduces some of the literature on child rights and the tension between the concepts of protection and autonomy. The chapter offers a thoughtful introduction to the literature on how sexuality has been researched in children's homes and the literature on children's rights. It is well researched and well written.

Chapter 2 introduces the literature that describes the social care for children in the two target countries, Japan and Bangladesh, and then moves on to look at the characteristics of children's homes in the two countries. This examination reveals that in both Bangladesh and Japan, institutional care is the mainstream for children whose parents are not able to care for them. Overall, this chapter is well written and provides the necessary context for the two case studies.

Chapter 3 is the first of the results chapters and this focuses on the issue of children's rights through the relationship between the children who participate in what she describes as the 'institutional management' of the home. By institutional management, Kihara is referring to carrying out duties that help support the economic and social aspects of the running of the home. It is based on the case study in Bangladesh. The children contribute to the running of the facility in various ways, including prayers, serving food, helping to attract donors, and asking family to provide clothes and other necessities. The ways in which the children are involved in these activities is considered from perspective of child rights and particularly autonomy. The main argument is that this participation transforms the children from passive objects-of-care to active subjects making provisions for the stabilization of the lifestyle of residents. In the discussion part of this chapter, it is suggested that we need to rethink how we think of the tension between autonomy and protection. The role of the institution is to protect these children, as their parents cannot fulfill this role. Yet, the children must play an active role in their protection by helping the institution raise funds and by doing chores to contribute to the smooth running of the home. Here autonomy and protection are directly linked.

Chapter 4 introduces the results from the study on discourses and practice around sexuality in Japanese children's homes. It is based on the fieldwork and interviews in Japan. Key themes that emerged are touch and physical contact (*skinship*) between staff and children and children and children; handling of bathing and laundry; and dealing with 'problematic sexual behaviour' or 'problematic sexual language'. The presentation of results would have benefited from more excerpts from the transcribed data and field notes. In addition, there is a lack of critical analysis in the presentation of results, but this is remedied to some extent in the discussion section.

Chapter 5 offers a similar analysis, but this time to the fieldwork data and interviews carried out in Bangladesh. Key themes from this data are childhood romances, laundry, bathing, staff-child physical contact, menstruation and modesty practices linked to female gender. The idea of a sexual taboo appears stronger in this data and the idea that anything sexual should be hidden. The boundaries between the children's home and the outside world are far more porous compared to the Japanese case study, and fear of scandal was a more prominent theme.

Chapter 6 examined the way in which children's rights are realized, based on an examination of the discourse and practices surrounding gender issues and the social background of children in institutions in Japan and Bangladesh. The Committee felt that this chapter was particularly interesting and well written.

The Concluding chapter brought the various themes together to clarify the findings and their contribution to the field. The Committee members highly evaluated the theoretical work around children's rights in relation to protection, autonomy and sexuality. The fieldwork was also highly evaluated. Overall, we felt that the research makes an important contribution to the field and reaches the level required for a PhD.